

森のある暮らしを楽しめる町を目指して

大磯町産業環境部産業観光課 弘重 穰

大磯の森と海を一望できる湘南平から

新たな価値が生まれ始めた大磯の森

大磯町は海のイメージを持たれることの多い町ですが、町の面積の約三分の一は森で、都心に近い立地にあるながら森と海がバランスよく融合した自然の豊かな町です。その大磯の森で、この数年の間に多様な活動が活発に行われるようになりました。

例えば、町内に林業グループが発足し、以前は人の手が入っていなかった町有林の保全活動が始まり、また、地主さんから依頼を受けて私有林の倒木の対応なども行われています。そこで切り出された木は、家庭の薪ストーブやレストランのピザ窯などに薪として販売され、エネルギーの地産地消と町内のカーボンニュートラルに一役買っています。また、木工作家さんが大磯の森の多様な樹種の特性を活かして、うつわやスプーンなどをつくり、町内のイベントで展示販売される動きも生まれ、今後、町産材を活用したローカルクラフトとして定着していくことが期待されます。また、今年度建て替えられる町の観光案内所にも町産材が使われる予定で、町内の豊かな森を来訪者の方々に知っていただくきっかけになることが期待されます。

他にも、森の中にかつて存在していた古道を復活させる活動も始まり、森の中を気軽に散策できる道が徐々に増えています。さらに、こうした森に関わる活動が地元の小学校の授業で取り上げられたり、地元の高

校生が活動に参加したりと、多様な人々が大磯の森に関わりを持ち、新たな価値が生まれ始めています。



林業研修（伐倒実習）



林業研修（作業道実習）

はじまりは「人づくり」から

このように町の魅力を高める地域資源として今後ますます期待の膨らむ大磯の森ですが、以前はこうした活発な動きが生まれるとは想像もつかない状況でした。大磯の森は広葉樹が主体で、針葉樹の人工林は全体のうちの約1割と少なく、もともと木材生産を目的とした林業は行われていませんでした。かつては薪炭林として使われていた森ですが、近年では資源として見られることもなく、人の出入りがほとんどない放棄された状態となっていました。そのため、イノシシやシカが自由に活動できる空間となった森は、獣害の拡大の温床になってしまっていたり、森の近くでは倒木の被害が起きたり、農地の日当たりが悪くなるなど、森が厄介者扱いされることが目立つようになっていました。そこで町は、こうした状況を打開できないかと考え、平成30年度から取り組みを始めました。✓



切り出した木を薪やクラフトとして販売（「薪屋大磯」の活動）

大磯の森の大部分は、ほどよく人の手が加わることで自然と人の暮らしの調和が保たれる里山の空間です。こうした健全な森を実現するために、町がはじめに力を入れたのは「人づくり」です。針葉樹の人工林に比べて経済的価値が低く見られがちな広葉樹の森において、その保全を図るために一般的に行われるのは、里山ボランティアの育成です。しかし環境整備が目的の無償ボランティアは、資金不足などで補助金依存・行政依存になりがちで、継続性や発展性に欠けるケースがしばしば見られます。一方で、大型機械を使った営利拡大志向の林業を急速に進めると、過剰な伐採による環境破壊につながる危険性があります。そこで、無償ボランティアでも急速な営利志向のどちらでもない、その中間的なあり方を目指すこととしました。それは、自然環境に負荷をかけないペースで森を資源とし

て活用し、持続可能な最低限の経済的価値を無理なく創出していく兼業・副業型の活動であり、それを担う人材の育成を行うこととしました。

このような考え方に基づいて町は、林業や森林保全を基礎から学ぶ研修を4年間開催しました。そしてその参加者の方々が、冒頭で紹介した活動の中心的な担い手として活躍しています。活動メンバーの多くは、普段は会社勤めをしながら、休日を中心に森での活動を行っています。そのような日々は、大磯の魅力を最大限感じられるものになっているかもしれません。その魅力は、「森のある暮らしを楽しめる町」と言えるでしょう。都心に通勤しながら、無理なく自然を相手にした活動ができ、地域に新たな価値とコミュニティを生み出すことができる。そのような魅力を敏感にキャッチした人たちが今、大磯の森に集まってきています。

森と新たな担い手との「つなぎ」が必要

以上のような森の活用と保全を進めていく上で、ひとつの課題となっているのは土地の「所有」に関わる問題です。狭い範囲で土地の所有者が細かく分かれ、土地一筆の中でも相続等の都合で権利関係が複雑になっていることも多く、また、所有者とコンタクトをとることが難しい場合もしばしばみられます。こうした状況の中で、活用されていない森を第三者が新たに活用しようとする、関係する所有者一人一人に合意をとるのに大変な時間と労力がかかります。また、一部でも合意が取れない土地があることによって、その周辺

部分の活用や整備が進められない場面もあります。

本来、森はその土地の地質や地形などにあわせて一体的なまとまりを考慮して活用や整備が行われることで、健全な環境が保たれます。しかし、所有権という人間社会の論理が、自然環境のまとまりとは異なる形で設定されることで、環境の健全性を阻害してしまうケースが見られます。

こうした状況を乗り越えていくのは容易ではありませんが、一つの試みとして町では、活用されていない森と、これからその森を有効活用しようとする担い手とをつなぐ取り組みを行っていく必要があると考えています。そのために町は現在、森の所有者に対して土地の利用意向を調査しています。この調査結果をふまえて、森と新たな担い手との「つなぎ」の仕組みを検討していきたいと考えています。

（大磯町産業環境部産業観光課）

midori

No.134

公益財団法人
かながわトラストみどり財団

AUTUMN
2024

箱根登山道整備
森のある暮らしを楽しめる町を目指して

シュロ葉ほうきを作ろう！
@ 京急百貨店